

宮

崎県南部の飫肥地域は、江戸時代に飫肥藩の植林奨励によって形成されたスギの林業地です。江戸時代初期の1600年代に挿し木造林が行われた記録があり、^{（かんづき）}弁甲材という木造船の材料に広く用いられた歴史があります。飫肥林業の歴史を現代に伝える景観、建造物、道具、文献・資料類が、2014年度に九州初となる林業遺産に選定されました。

研究資料として遺産登録された「飫肥林業発達史」によると、飫肥藩による造林奨励の目的は、窮乏していた飫肥藩財政を立て直すことであり、当初から他地域に木材を販売することが目指されました。飫肥の弁甲材は、藩政期には大阪や瀬戸内海、北九州地域へ販売され、海運の発達とともに需要が増大し藩財政を潤したとされています。明治、大正時代になると、さらに朝鮮や台湾、中国まで出荷先が広がり、戦後も韓国や瀬戸内海、沖縄などへ出荷されていました。

船の材料に使われる木材には、軽くて浮力が大きいこと、節が生き節で抜けないこと、岩礁にぶつかるなどの衝撃を受けても材が裂けにくいことなどの質が求められ、それにぴったりだったのが飫肥杉でした。飫肥杉には16品種あるとされ、オビアカ、タノアカなどの心材部分が赤系のものとトサグ口など黒系のものがあります。総じて軽く、油分が多く腐りにくい、粘りがあり曲げやすいという特質



「はつり」を施すはつり師（富永佐喜義氏）



三ツ岩林木遺産資源保存林



日本森林学会による

日本の林業遺産を知ろう！

第 5 回

飫肥林業

一般社団法人 日本森林学会 林業遺産選定委員長 佐藤 宣子



弁甲材で復元された木造船(チョロ船)
(樹齢80年以上の飢肥杉を使用)



堀川運河で弁甲材を筏にして運ぶ様子(昭和40年頃)



はつりよき



山林台帳や契約資料

をもっていました。年輪幅が広いと軽い材となるため、施業方法は、疎植で肥大成長を図り、枝打ちなし、間伐なしまたは1回程度で、伐期は60〜80年程度でした。江戸時代の記録では、植栽本数ha当たり750本という例もあります。つまり、同じスギ材産地といっても、密植、多間伐、長伐期を特徴とする吉野林業の対極にある林業地だと言えます。弁甲材向けの育林方法で育てられた日南市内のスギ林2カ所(木材商で「飢肥林業御三家」といわれた川越本店の所有林と国有林内の三ツ岩林木遺伝資源保存林)が林業遺産として登録されています。

また、弁甲材という造船用材需要は、造材、加工、流通においても独特の技術を展開させました。造材は6〜15mの長材で、丸太の両面を削る「はつり」が施されました。「はつる」ことで、集運材や船積みが効率的になり、材質を見るこ

とができ、船板としての加工もしやすくなりました。材は広渡川を流送され、堀川運河を通って、運河護岸にあった貯木場へ運ばれました。運河沿いの加工工場で弁甲材に加工され、油津港から各地に積み出されました。広渡川と油津港を結ぶ全長900mの堀川運河は、飢肥藩主であった伊東祐実が命じて掘削されたもので、1686年に竣工し、飢肥林業の興隆に大きく寄与しました。林業遺産には、最後の「はつり師」とされる富永佐喜義氏が使用していた道具類と堀川運河、流送の写真や文献類、苗木の生産から造船までの一連の工程を映像にした「飢肥杉の一生」が登録されています。

さらに、飢肥林業を特徴づけるのが部分林制度です。藩は領民(下級武士や農民)との間で、伐採後の藩と領民の取り分を定めて造林を推進しました。分収造林の先駆けともいわれ、「三部一山」という藩三分の一、民三分の二の取り分といったものが多いとされていますが、時代によって分収歩合は変化し、また植栽から数年間は農作物の間作を認めることなどを示す山林台帳や契約資料が多数残されています。明治期の土地の官民有区分では、藩政期の部分林の多くが国有林に区分されます。今日まで、国有林と個人、集落、自治体の間で多様な分収契約が残っており、それらを記述した「飢肥林業発達史」は分収造林の歴史研究の必読書となっています。

弁甲材生産で興隆を極めた飢肥林業ですが、1960年代から木造船の建造が徐々に廃れたことにより、弁甲材市場はそれに合わせて喪失していくことになりました。しかし、近年、飢肥杉は建築用材として好まれるようになり、宮崎県のスギ生産を牽引しています。

飢肥林業振興対策協議会は林業遺産選定の記念として、「飢肥杉と弁甲材」400年の軌跡を発行しました。同協議会副会長の福岡浩一さん(日南地区木材協会会長)は「飢肥林業400年の歴史は、生活の糧として伐っては植えてきたサイクルであり、林業遺産の選定を活かして飢肥杉のブランド力を高めた」と話します。また、本年8月には同協議会が主催して、林業遺産・飢肥林業のシンポジウムが開催されます。同協議会事務局の日南市水産林政課によると、「近年、伐採が進み再造林が放棄される山林が増えるなどの問題も抱えており、市民が山への関心を高めるきっかけにしたい」とのことでした。

このように、木材加工・素材生産に携わっておられる方々や地元自治体が、先人たちが築いてきた飢肥林業の保存や活用に積極的に関わっています。